
自校教育授業の目的と成果 —授業実践を振り返って— (自学を学んで知ることの驚き・喜び・誇り・疑問)

岩手大学 評価室 教授 大川 一毅

はじめに

(1) 自校教育のとらえ方

本報告にあたって、自校教育を「大学の理念、目的、沿革、組織・制度、人物、教育・研究の現況、など自校（自学）に関わる特性・歴史・現状・課題等を教育内容・題材として実施する一連の教育・学修活動」と大枠で定めておく。こうした自校教育を実施する大学が増えている。ただし、自校教育の実施目的、内容、方法、授業形態は多様である。それぞれの大学にそれぞれの自校教育がある。「絶対的」な自校教育は存在しない。

(2) 自校教育をやってみて「意外なこと」

自校教育授業を担当し、あるいは他大学訪問調査からわかった「意外なこと」がある。たとえば学生は「理系学生の履修者が多く、しかも熱心」、「自分の大学の歴史や取り組みはよく知らない。関心も無かった」、「他大学のことは知らない。受験もしていない」、「日本史は習っていない。よく知らない（でも嫌いではない）」、「高校（母校）の歴史も知らない。教わったこともない（この授業で初めて知る母校校章や校歌歌詞の意味。旧制中学のいわれ）」、「大学への愛着は小学校へのそれに近い（高校への愛着が強い）」、「卒業生に会ったことがない（定かではない）」などである。

自校教育に関わる「意外なこと」を意外なままにせず、むしろそれを前提にして、各大学それぞれの事情や教育の考えに則し、独自の自校教育授業を創造することが肝要である。

1 自校教育普及の背景

(1) 不本意入学者の増加

自校教育が普及していった背景の1つに「不本意入学者の増加」がある。「大学全入化」の進行や、家庭からの要請もあって「入りたい大学よりも入れる大学」への進路指導・進学動向が進んだ。それにともない「大学が好きになれない」、「大学で何をしたいかわからない」、「学修意欲がわからない」、「大学に居場所が見いだせない」、「将来の希望が持てない」といった学生も増加した。そこで自校教育に着目する大学が出てきた。自校教育授業を「自分の入った大学はどのような大学なのか」、「ここで何ができ、どんな可能性があるのか」、「そのために何をしたらよいのか」など、大学を知り、自分が大学とどう関わっていくかを意識させる契機と位置づけて、それぞれに展開していった。

(2) 「大学力」強化に向けた「全学一体化」

少子化にもかかわらず大学数は増加し、大学間競争は激しい。志願者・進学者をはじめ保護者や雇用先など、ステークホルダーは大学に成果を要求するようになった。こうした状況にあって、各大学は「大学力」の強化を図るべく「全学一体化」を進めた。ここでも

自校教育が着目された。学生のみならず、教職員、卒業生等が自校教育に参画することで構成員それぞれが大学の現状を知り、将来を考え、自分にできることは何かを模索する。これによって所属意識も高まる。こうした契機を提供するものとしての期待があった。

(3) カリキュラムの自由化、教育内容・方法の多様化

大学教育の内容・方法の変化も自校教育の普及を促進した。大学設置基準の大綱化(1991)以降、カリキュラムの自由化が進み、テーマ別科目や学際科目など新しい授業科目が登場した。これら授業では問題解決型や学生参画型等の授業形態も多い。こうした中で、全学生の共通題材である「大学」を取り扱い、多様な教育・学修内容や方法を設定でき、教職員や卒業生、地域市民も巻き込んで参画できる授業として自校教育が普及していった。

(4) 大学周年事業の継承

大学周年事業を継承した自校教育授業の開講も多い。新制大学制度の発足(1948)、新制国立大学の発足(1949)から50年経った1998年から2010年代に、大学の周年事業が盛んになった。そこでは各種式典をはじめ、学部新設や新キャンパス事業などの他、全学同窓会の組織化や年史編纂、大学アーカイブスの設置も行われた。この年史編纂事業で収集した資料や刊行書籍、作業を担った人材を活用すべく、自校(史)教育も行われるようになった。

2 岩手大学で実践している自校教育

(1) 授業の目的と内容

報告者(大川)は、勤務する岩手大学で「大学の歴史と現在」という自校教育授業を担当している。これは半期15回の教養科目(選択科目)であり、同一内容で前期2コマ(「1年生クラス:68名」と「2年生クラス:98名」)、後期1コマ(「2年生クラス:62名」)を開講している。

シラバスには「授業目的」をこう掲載した。

「大学」という組織やその制度の歴史の変遷を学ぶことを通し、自分たちの所属する「岩手大学」及び自分たちの「大学での学び」を客観的に捉え、当事者の一人として今後の進むべき道を考えることを目的としています。

「到達目標」には次の3点を掲げた。

- ・日本の「大学」の誕生時から現在までの歴史的流れについて語ることができる。
- ・岩手大学の学生として自学への理解を深め、第三者に岩手大学の特性を語るすることができる。
- ・岩手大学で自分が何を学び行動したいのかを考え、その内容を他者に伝えることができる。

「授業の概要」は以下の様に記載した。

大学はどこも同じではありません。どの大学にも歴史があり、ドラマがあります。それぞれの時代状況の中で、大学は自らの使命(ミッション)を掲げて創立し、その実現に向けて多くの人々が力を合わせて発展させてきました。岩手大学も例外ではあ

りません。ならば私たちの岩手大学にはどのようなドラマがあるのでしょうか。(中略)

日本の大学の歩みの中で、岩手大学は何を期待され、どう応え、そして今、いかなる可能性に向かって歩みを進めているのか。高校の進路指導では伝えてくれなかった「岩手大学 PRIDE (プライド)」を歴史の中から理解していきます。

授業計画の後半では、岩手大学の職員スタッフを講師として「岩手大学の現在とこれから」についてお話しいただきます。職員さんは岩大出身者も多く、皆さんの最も身近な先輩です。日々の仕事をふまえた「岩手大学のスペシャリスト」としてのお話から、大学の多様な側面が見えてくるでしょう。

我等が学長先生もご登壇くださいます。ご期待下さい。

(2) 授業計画と担当者

①「大学の歴史」パート

本授業は全 15 回構成の講義形式授業である。授業計画では、初回から 10 回までを「大学の歴史」パートとして、日本における大学の歴史を授業主担当者である大川が講義する。この大学史講義に織り込んで、岩手大学に連なる前身校（岩手師範学校、盛岡高等農林学校、盛岡高等工業学校）それぞれについて、いかなる時代背景のもと、どのような使命を託されて設置されたのか、そこでの教育内容や卒業後の進路はどうだったのかを説明する。学生を取り巻く社会生活環境や学生文化にも言及する。履修学生達は、これら講義から、今日に繋がる大学の系譜、学園風土、キャンパスや学生寮・大学校舎の歴史的意味、地域との関わり、学生達の矜持、社会からの期待、などを自覚的実感的に理解していく。

授業外学習として、各授業回後に「今日の授業からあなたの『トピック』を見いだし、そのことについて自由に考え、調べ、それを i カードで報告してください (200~400 字)」という課題を提示する。授業回を重ねるにつれ、学生は授業の中に興味あることを主体的に見出すようになり、そこから設定した課題について文献調査や実地検分、時には当時を

回数	授業テーマ	担当者
1	「国家近代化と大学」	大川
2	「帝国大学と専門学校」	〃
3	「盛岡高等農林学校の設立」	〃
4	「大正・昭和前期の高等教育」	〃
5	「戦争と大学」、「盛岡高等工業学校の設立」	〃
6	「新制大学の発足（岩手大学の建学をめぐるドラマ）」	〃
7	「高度経済成長と大学の量的拡大」	〃
8	「学生紛争の嵐と大学改革」(人文社会科学部の設置)	〃
9	「1970~1990年代の日本の大学」	〃
10	「21世紀を迎えた大学」(国立大学の法人化)	〃
11	「グローバル化の実態と岩手大学の国際化戦略」	国際課職員
12	「岩手大学のキャリア支援」	キャリア支援課課長
13	「岩手大学の地域貢献活動とCOC」	地域連携センター教員
14	学長講話「岩手大学の目指す姿」	学長
15	「大学職員という仕事」	人事課職員&新入職員

知る家族や知人へのインタビューなどに取り組み、その結果を文章にまとめ、次週までに報告する（webを使用したレスポンスシステムで「iカード」と呼ぶ）。次回授業の冒頭では、学生から提出された様々な論点や内容の報告（レスポンス）を披露することも多い。

②「大学の現在」パート

授業後半の第11回からは「大学の現在」パートとして、岩手大学の各部署で業務を担う職員や教員に登壇願う。登壇者への依頼は数ヶ月前から打診する。授業計画には、岩手大学の運営重要事項と位置づけられる「地域貢献」と「グローバル化」に関する内容は必ず組み込む。平成28年度の授業では、キャリア支援課、国際課、地域連携・COC事業推進室、さらに大学全体の組織体制や職務を包括的に解説できる人事課の職員に登壇してもらった（年度によっては総務課の場合もある）。人事課職員の担当回授業（2年生クラス）では、大学職員という仕事や、その採用・研修システムについても語っていただいた。将来の就職が気になり始めた2年生にとって興味をひく内容だったようだ。

③ 新任職員の授業参加

初任者研修の一環として、岩手大学の新入職員も1年生クラスの授業を聴講している。授業の最終回は、新入職員に「大学職員という仕事」というテーマでの授業企画・担当を依頼している。平成28年度は新入職員5名全員が岩手大学卒業生だったことも含め、本題の他に、学生時代のこと、就職活動のこと、1年生に期待する大学での学びや生活などを語ってくれた。今回授業を担当した新入職員達は、2ヶ月前から自主的に集合して授業案を練っていた。結果としてこの授業企画・担当も初任者研修となり、授業当日は人事課の職員研修担当者も参観した。自校教育は、教員のみならず、職員、卒業生、地域市民など、様々な人材の参画が可能である。教員も複数体制で共同担当することが多い。ただし、学内外参画者が多くなれば、人選や日程調整、授業計画の立案など、対応課題も増える。授業担当者の派遣に難色を示す学内部署や上司が存在するのも実際である。

授業を担当してくれた新入職員さん達には、後日、担当授業に対する学生からのレスポンスカード、並びに大学コンソーシアム京都FDフォーラムのこの分科会資料（当日使用したパワーポイント資料）を提供した。これに対し、以下の返事を寄せてくれた。

レスポンスカード、自校教育に関する分科会の報告資料、どちらもありがとうございます。読んでみると学生さんに個別に答えたいことがあったり、色々と考えさせられたりしております。4月に職員として採用されてから9ヶ月しか経っていませんが、もう初心を忘れていることに気づかされました。時々振り返らないといけないと改めて思います。また、学生の時に「大学の歴史と現在」を受講していたにも関わらず、もう一度、学生として今の「大学の歴史と現在」を受講したくなりました。学生のみなさんのレスポンスカードに感動したこと、今回いただいた分科会資料で自校教育の意義がわかったことがその理由です。いただいたレスポンスカードは今後も時間のあるときに読み返したいと思っております。自分の中だけに収めておけなかったので、メールさせていただきました。お忙しいところすみません(^);

3 自校教育授業の成果

(1) 学生からのレスポンスカード

こうした自校教育授業によって、学生はどのような感想や自覚を持ったのか。まず第3回授業「盛岡高等農林学校の設立」に対する授業後レスポンスカードの記載を紹介しよう。自学の歴史を知ることで得た驚き、喜び、誇り、自覚について素直に記載している。

私は岩手大学が第一志望ではなく、あまり誇りを持てなかったが、このように大学の歴史を知ることで誇りを持てるようになり、知り合いなどに聞かれたら自信をもって岩手大学について語りたと思った。(1年生)

岩手大学の前身、盛岡高等農林学校の設立の背景には、大変驚かされました。当時の東北地方の大凶作問題の克服および復興、東北地域の発展・開発、というような、重大な使命をもって設立された盛岡高等農林学校。当時の学生は地域の希望であり、誇りであり、地域の発展に貢献する人材として期待されていました。そして現在、岩大生はおそらくそのような自覚は持っていないと思います。これからは、岩大生として責任と自覚をもって発言、行動していこうと思います。(2年生)

第6回授業「新制大学の発足（岩手大学の建学をめぐるドラマ）」は、今日の岩手大学に繋がる新制大学発足期の動向を内容とする。これには次のような感想が提示された。

大学設置の際に市民がお金を出し合った岩手大学は「地域の希望の星」だったという授業での話は嘘ではないのだと感じた。岩手大学に来て良かったと思った。(1年生)

自分が通っている大学が地域と深く根づいていて、たくさんの交流をしてきたと知って、とても誇らしい気持ちになった。(2年生)

(2) 授業アンケートでの感想

全授業回終了後の「授業アンケート」にも学生からの感想が提示されている。授業の到達目標に照らせば、成果検証にもなる。いくつか抜粋してみよう。

(1年生)

- ・大学の歴史だけでなく、現代の大学が抱える問題を考えられるようになった。
- ・授業、カード、レポートなど自ら考える機会が多くあり、非常にためになった。
- ・岩手大学をはじめ、偏差値だけでは分からない大学のよさを知ることが出来た。
- ・自分が入学した岩手大学をよく知ることが出来た。
- ・先生の話が分かりやすく面白かった。全部出席すればよかった。
- ・一年生のうちに、岩手大学の歴史を知ることが出来た。
- ・自分の大学の歴史を学び、愛着が持てた。
- ・学びと発見と驚きの連続だった。
- ・自分の大学に誇りを持つことが出来た。
- ・職員の方のお話しが面白かった。大学を支えていただいていることがよく分かった。

- ・学長先生はお金が好きだった(スミマセン。私達のためにお金で苦勞されているのですね)。
- ・大学が地域や環境のために行っている様々な取組に感動しました。
- ・大学時代の過ごし方が分かってきた。将来を考えるようになった。

(2年生)

- ・学長先生と話す機会はとても貴重でした。
- ・底辺の大学だと思っていたから、誇りを持てるきっかけを得て嬉しかった。
- ・自分の現状を把握し、課題を見つけることが出来た。
- ・岩手大学について、人に話をする事が出来るようになった(誇りと愛着をもって)。
- ・自分の大学の歴史を知る事なんて、ありそうでない。いい授業だった。
- ・大学職員の方々のお話は貴重だった。大学職員という仕事に関心を持った。
- ・文章力が上がった。
- ・将来について考える機会になった。
- ・岩手大学の歴史から、私たちに求められている期待が分かってきた。
- ・大学の歴史を学ぶのは面白い。

これらのように、アンケートからは「自学の歴史を知ることで、大学への誇りを持つことができた」、「大学で何ができるのか、何をすべきか、という指針が見えてきた」などのコメントを多くみる。全国で実践されている自校教育授業を見聞しても、そこでは安直な大学礼賛や自虐的な大学批判は意識的に避けている。むしろ大学の様々な課題を学生に提示して将来のあり方をともに考えていこうとする姿勢を示す。「学生諸君は大学の重要な構成員(あるいは主人公)であり、諸君の力によって大学は作られていく」というメッセージに、学生は建設的に反応する。本授業においても、最終課題「岩手大学への提言」にあつて、学生達は大学を取り巻く現状を客観的に分析しながら岩手大学のめざす方向性をホームページや広報誌、学長講話の内容などから確認し、これをふまえて学生の視点やアイデアを反映させた建設的提言を提出した。本授業で到達した学修成果である。

(3) 自校教育授業への懐疑

しかし自校教育授業に全ての学生が肯定的ではない。「自学を知ることにとりだけの意味があるのか」、「そもそもこの大学は行きたい大学ではなかった。そのような大学の精神などに染まりたくないし、大学の歴史も知りたくない」。こうした意見もある。自校教育実施上の重い課題である。とはいえ、学生からのこうした懐疑に自校教育授業が直接応えなくてもいいのでは、という考え方もある。そうした思いがあるにせよ、学生はこの大学で学び、将来に備えなければならない。学生の懐疑や問題意識は、キャリア支援教育にバトンタッチして継続的有機的に指導するのも一案である。

結びとして

学生は、大学との関わりが濃密であればあるほど、あるいはキャンパスで過ごす時間が長いほど、大学への帰属意識や愛校心を強く持つようになると言われる。自校教育そのものが学生の大学満足度や愛校心を高める特効薬・万能薬ではない。しかし、自校教育が学生の大学参加意欲を促す契機にはなる。たとえば自校教育が、学生の主体的・能動的学修、大学行事・企画への参加、課外活動・社会貢献活動の参加、自分の将来づくり(キャリア形成)に意識的参画、などへの「関心、意欲、行動」を導いているか。これが重要である。これらは自校教育の成果指標ともなる。